



郷土史

ていね

第 62 号

平成 25 年 2 月 13 日

手稲郷土史研究会会報

第 81 回（平成 25 年 1 月 9 日）定例会の研究発表要旨

新聞をウラから見れば

稲穂 一ノ宮 博昭氏

▼ 35 年勤務した讀賣新聞を、平成 6 年定年退職した。北海道支社勤務で、記者クラブすべてを回り、わずか 2 年だが岩見沢支局長も体験した。昭和 34 年、全国 3 紙が札幌に同時進出、その混乱にまぎれて入社できた。

▼ 市長や知事、高裁長官らの会見に同席、ずい分生意気な質問を繰り返す仲間が多勢いた。ケタの大きな道予算の解説を平気で書き連ねる輩の中に、薄野のツケを払わず、女将から内容証明郵便物を突きつけられ、青ざめた記者もいた。

▼ 新聞は一般的に、航空機墜落、炭鉱爆発といった大事件が発生すると、その報道に一直線となる性格を持つ。が、世の中が静かなときほど、社内の葛藤がすさまじいと思えば間違いない。スケッチという手法で紙面を埋めることがままある。大通り公園の花壇がきれいだ、とか、気温の低い朝、出勤を急ぐ道庁前の通勤客 —— などが登場したとき、社内はもう、ハチの巣を突っついたようになってる。こんなものが新聞か、デスクは誰だ、筆者は誰だ、カメラマンは誰だ、といった具合だ。もっと、新鮮なネタがあったはずだというわけだ。

▼ 他紙にない記事を書けたとき、特ダネという。ものによっては、編集局長や社長から頭賞される。が、この逆もある。どの新聞にも出ているのに、讀賣だけが載っていない。これを特オチという。前終記者が知らなかったのか。デスクが出稿を止めたのか、編集が掲載をやめたのか、と。そして責任が追及され、当事者は始末書を出すハメとなる。

▼ 記者はやはり、大きく出た記事を自慢したい。ひとつ上げるとすれば、白鳥事件の再審請求事件だ。決定送達日の朝、棄却の公算が強いと書けた。成功確立 50% の記事。今、考えても大冒険だったとゾーッと

とする。

▼ 残念至極な思い出もある。美唄市職員が昭和天皇の崩御日をトトカルチョにしていた。確実なウラが取れず、書けなかった。もし、これが活字になっていたら、どんな反響を巻き起こしていただろう。

▼ 本会会員に多彩な体験の持ち主が多勢いる。手稲をもう一步出た獅子奮迅ぶりを、ぜひ、聞いてみたい。



次回の予定

次回（3 月 13 日）は、村元健治氏の研究発表「拓北農兵隊手稲分隊の入植経過と苦悩」と“平成 24 年度を振り返る”話し合いを予定しております。

会場は、視聴覚室です。

第 7 回歴史年表 学習会資料より

資料提供：茂内 義雄 氏

山菜 援農に婦人部隊

五日から毎日五百人出動

札幌市では今回の緊急工事と並行して今度は婦人を主たる対象に六月五日から毎日五百人づゝの山菜採取ならびに近郊援農勤労奉仕隊を出動させることになったが、差し当たり五日から十四日まで軍納わらびの採取にあたり、十六日からは援農出動となる、そしてわらび採取出動者には現下の食糧事情を考慮して採取量の半分を各家庭に保有させることになった、市民は相次ぐ勤労出動により相当支障もあろうと予想されるが留守宅は隣組で守り配給その他に心配のないやう一段の協力望まれてゐる、なほわらび採取の動員要項ならびに各連合公區毎日の出動人員は次の通り

- 山南二八名、●●四一、西部三四、西創成三〇、豊水二四、東二八、本府一八、中部西一八、桑園三四、中央一五、東北二一、鉄西二三、幌北一八、鉄東四〇、苗穂三四、白石二四、豊平三三、円山三七

要項

- 一、動員は婦人を主たる対象とするもやむを得ざる場合に限り男子も参加を認めるが、病弱者、乳幼児を有する母親学徒隊および学徒隊編成中の教職員、挺身隊員、重要工場工員軍属は除外すること
- 二、編成は各連合公區ごとに小隊を編成すること

- 三、六月十五日は休日とす
 - 四、わらびは軽川で五日より十四日まで毎日午前七時半札幌駅前集合、午後五時半札幌駅前帰着
 - 五、雨天にて中止の場合は公區から電話で市に照會のこと
- なほ本要項は目下地域職域國民義勇隊が結成途上にある措置で七月以降の動員措置については追つて指示するはずであり、この間職域出動者については職域長の理解ある措置が望まれてゐる

(昭和二〇年六月三日)

手稻鑛山の大大的開發

着々準備進む

この程三菱鑛業の手に歸し大資本によつて開發される事となつた手稻鑛山はまづこれが手始めとしてこの程北水から買電契約を済ますと共に直に二台の壓縮機を据付愈これにより七八台の鑿岩機をもつて大々的に掘鑿する事となつたがこの結果従來僅に一ヶ月七八米突しか掘進しなかつたものが同鑿岩機により數十倍の掘進をみる事となり二三日前この旨札幌鑛山監督局に届出た

(昭和一〇年八月二四日)